

# 古河歴史見聞録

## 土井利勝

3代將軍家光を教え導く

寛永の三輔・徳川家光の家庭教師

新井白石の『藩翰譜』によれば、元和元(1615)年9月、徳川家康と秀忠は、後に3代將軍となる竹千代II徳川家光の傳役として酒井雅楽頭忠世・青山伯耆守忠俊・土井大炊頭利勝を指名したとされています。「寛永の三輔」と称されたこの3人の話は、江戸時代を通じて大いに流布しました。およそ180年後、12歳の鷹見忠常(泉石)も寛永三輔像を模写しています(10月12日(土)・11月24日(日)、古河歴史博物館にて公開予定)。

酒井雅楽頭忠世と青山伯耆守忠俊

ところでこの寛永三輔なる3人は、いずれも2代將軍徳川秀忠の年寄(後の老中)を務めていた幕府初期の重鎮で、それぞれ智・仁・勇を備える人物として徳川家光の師傳に当たったとされます。「仁」の担当は最年長者の酒井忠世(1572~1636年)。或る日のこと、家光に対面した忠世は、床の間の刑部梨地印籠に目を

とめます。刑部梨地とは、当時流行の漆工品で金箔・大粒の金銀粉末などを用いた高価な贅沢品、しかのみならず家光と男色関係にある堀田正盛からの贈り物でした。赤面して身をよじるばかりの家光に、忠世は次のように諭します。かつて大御所家康は、茶宇縞という高価な舶来絹布の袴姿の小性に対して「奢りを始めて乱の端を起す不届き者」と立腹したと。その後、この印籠は忠世によつて庭石に打ち棄てられました。

青山忠俊(1578~1643年)は「勇」。忠俊は、若年の家光が「然るべからざる」言動をするときに成敗覚悟で諸肌を脱ぎ脇指を出して「御心を直しなされ」と、幾たびも諫言したと伝えられています。

また、当時流行った伊達者よろしく合わせ鏡で髪を上げるおめかし中の家光に対し、憤怒の相の忠俊がその鏡を取りあげると庭へ棄てて戒めたという話もあり、不機嫌そうな家光の姿を垣間見ることができるとしよう。

智の大老 土井利勝

いささか煙たがられた両者に比べて、土井大炊頭利勝は「智を以て諫めよ」という徳川秀忠の言葉を実践し機知に富む対応を示します。酒井忠世と青山忠俊の諫言は、將軍を継ぐ立場の家光に必要なことでしたが、一方、若年ゆえに未熟な家光には耳障りであったに違いありません。

寛永三輔における土井利勝は、2人と入れ替わり家光の前に盃を持って現れ、くさくさする家光の気持ちをはぐしつ「一杯の酒、一世の栄華」と酒の相手をはじめます。心のうちが晴れていく家光の様子を確認しながら、利勝は忠世や忠俊の忠言を「尤も至極」としてとりなしました。やがて家光は、利勝のこうしたアシストによつて両者の諫言を受け入れることとなります。

土井利勝は、江戸初期の組織や制度が未整備であった幕府草創期に欠くことのできぬ存在でした。それゆえに多くの大名は、迅速で

的確な判断と正確で有益な情報を与えてくれる利勝を頼りに將軍への「取次」を求めています。「弥大炊殿一人にて」というとおり、この時代の幕府政治は、利勝の意向で決まるというほど彼に権力が集中していました。

特定の人物に権限が集まりやすい反面、いわゆる宇都宮城釣り天井事件の本多正純はじめ、権勢をふるった大名でも瞬時に失脚することも少なくなく、寛永三輔の酒井・青山両人でさえも後に家光政権から遠ざけられています。

そうした時代背景にあつて土井利勝は、2代將軍徳川秀忠をして家光に「天下と共に利勝を譲る」といわしめるほどの実力者であり続け、寛永15(1638)年に大老に就任するなど、その高い信頼が失われることはありませんでした。12歳の鷹見忠常少年は、権力に奢らず公明正大でバランスを重視した土井利勝に政の理想を見だし、心の教科書として寛永三輔を謹写したのでしよう。

古河歴史博物館学芸員 永用俊彦

【一般書/随筆】

老いの贅沢

曾野綾子 著

人生の無駄を捨て、自分にとって一番大切な部分に時間をかける。会いたい人に会い、食べたいものを食べる…。日常の悩みに応え、前向きで豊かな老後の楽しみ方を伝えるメッセージ集。

出版社…河出書房新社

【絵本】

みちくさ

さとうわきこ 作

学校の帰り道、ちょっと道草して帰ろうと思った少年。でも、草のおばけに出会ったり、マンホールのふたが縄跳びしてたり、のぞいた美容室にいたお客さんは野菜のマダムたちだったり…！

出版社…偕成社

【一般書/小説】

娘が巣立つ朝

伊吹有喜 著

娘の婚約をきっかけに一家は荒波に揺さぶられ始める。父母そして娘。3人それぞれの心の旅路は、ときに隔たり、ときに結びつき…紡がれていく家族の物語。

出版社…文藝春秋

【児童書/読み物】

海のなかの観覧車

菅野雪虫 著

5歳の誕生日の記憶がない透馬。15歳の誕生日を迎える直前に届いた手紙には、ビニール袋に包まれた黒い砂が入っていた。かすかに残る遊園地の記憶と黒い砂を手がかりに、透馬は真実を追い求め…。薄れゆく記憶と再生の物語。

出版社…講談社

## 図書館の本棚から



古河図書館

## ファインダー越しの昭和時代

Time Travel Photographer

明治18年に鉄道が開通し、古河駅では鉄道輸送が増え、踏切の開閉頻度も多くなりました。列車が通るたびに、遮断機を上げたり下げたりする踏切のおじさんが忙しそうでした。

古河市在住写真家  
鈴木路雄さん



鍛冶町通りの踏切

昭和32年秋

